

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 五十嵐 有紀  |
| ヨミガナ    | イガラシ ユキ   |
| 学位の種類   | 博士（文化財）   |
| 学位記番号   | 博美第484号   |
| 学位授与年月日 | 平成27年3月25日  |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉 「年中行事絵巻」の復元研究<br>—東京・田中家蔵 住吉本模本を中心として—<br>〈作品〉 「年中行事絵巻」朝覲行幸（部分）の想定復元模写<br>「年中行事絵巻」朝覲行幸（部分）の下図の想定制作 |

論文等審査委員

|          |        |       |            |       |
|----------|--------|-------|------------|-------|
| （主査）     | 東京藝術大学 | 教授    | （美術学部）     | 宮廻 正明 |
| （論文第1副査） | 東京藝術大学 | 客員教授  | （美術学部）     | 有賀 祥隆 |
| （作品第1副査） | 東京藝術大学 | 准教授   | （美術学部）     | 荒井 経  |
| （副査）     | 東京藝術大学 | 教授    | （美術学部）     | 木島 隆康 |
| （副査）     | 東京藝術大学 | 非常勤講師 |            | 大竹 卓民 |
| （副査）     | 東京藝術大学 | 特任教授  | （社会連携センター） | 伊東 順二 |

（論文内容の要旨）

本研究は、消失した原本に代わる模本事例として東京・田中家蔵住吉本「年中行事絵巻」（以下、住吉本）を取り上げ、図像の模写精度を立証した上で画面構成に関する検証を行い、「年中行事絵巻」原本（以下、原本）像と成立背景に関して試論を提示するものである。本研究の目的は、住吉本に含まれる情報を精査し、原本像を想定復元するための糸口を見出すことである。また、本研究は実技的観点から住吉本を考察しその結果を提示する点において、先行研究とは異なる意義があると考えられる。

原本は、文献史料と模本によって現在に伝わる絵巻で、平安院政期に後白河院の下命を受けて複数の宮廷絵師が制作したとされる。後世の文献では原本は全60巻であったとされるが、原本成立当時の文献が存在しないために真偽は不明である。また、模本類は複数系統現存し、そのうちの一系統に住吉如慶（以下如慶）・廣澄（具慶）ら筆の住吉本がある。住吉本は、その描写の質と量に加え現存最古の模本であること、そして同奥書の内容によって最も原本に近いと位置づけされた模本で、住吉本図像との比定によって原本の制作に国宝「伴大納言絵詞」を描いた絵師が関与したとする説が指摘され定説化してきた経緯がある。しかしその一方で、模写であるために研究史料としての図像の限界、つまり模写精度が不明である点と「摹し崩れ」が含まれる点が指摘されてきた。しかし筆者が調べた限りでは、これまでに行われてきた住吉本図像に関する考察は主に美術史的観点からのもので実技的観点からの考察は行われていない。したがって住吉本図像の限界に関する指摘には検証の余地があると思われた。そこで筆者は、検証によって住吉本の模写精度を明らかにした上で原本像を想定復元する本研究を着想した。

住吉本の模写精度を検証した結果、住吉本は原本図像を正確に記録することを重視して制作された模本で、その制作方法は薄い料紙を使用した敷き写しであると推定できた。しかし、形象を正確に写すことを最優先する上で料紙が変更された他、絵画としての空間意識が損なわれた平板な印象の図像となった可能性が考えられた。しかしながら住吉本は、図像を構成する線描については極めて高い精度で原本図像を捉えている可能性が高いと結論できた。

先行研究では、住吉本図像に「摹し崩れ」が見られる点が史料としての限界の所以とされてきた。しかし今回の検証結果から、如慶らはすでに「摹し崩れ」ていた図像を正確に写し取った可能性が指摘できた。つまり、住吉本に含まれる図像の「摹し崩れ」は如慶らによるものではなく、原本制作時に生じたものである

と考えるのが自然であると思われた。さらには検証結果に基づいて原本像を仮定すると、後白河院の関与が確実視される他の同時代作例の性質と比較した原本は絵画作品として違和感がある作品であったと言える。当時、数々の名作を描かせた後白河院が「年中行事絵巻」を制作させた背景にはどのような経緯があったと考えられるだろうか。

住吉本図像に見られる絵画表現の違和感についてさらに検証を行ったところ、住吉本の手本となった「年中行事絵巻」制作は異なる条件下で制作された複数の部分的な下図を組み合わせて画面構成し、これら下図図像を料紙に転写してなされた可能性が推測できた。したがってこの点から推察して、下図図像の転写作業において図像に「摹し崩れ」が生じた可能性が挙げられた。さらには、原本制作に使用された下図に「伴大納言絵詞」の筆頭絵師筆の図像が含まれていたために住吉本図像中に「伴大納言絵詞」の作風が継承された想定すると辻褄が合うように思われた。

本検証で導き出した原本の制作方法から、作品の絵画性を演出する上で重要な要素よりも作業効率を優先した可能性を見出し得た点において、「年中行事絵巻」の異質さを明示することができた。この点から、後白河院は「年中行事絵巻」に対して絵画作品としての描写の質や空間表現の美しさを求めず、日常的な喧騒を伴った都の風景を敢えて写實的に描かせたと考えることができよう。さらには貴族中心の宮中行事のみならず民間風習までが混在するように描写されることから、後白河院が生きた当時全ての要素を描き収めることが「年中行事絵巻」制作の目的であったのではないかと推測した。

「年中行事絵巻」成立の背景には、武家勢力の台頭によってもたらされた後白河院の権力衰退の影響が指摘される。このような時流において制作された「年中行事絵巻」は、後白河院が治天の君として眺望してきた時間と空間の全てを一度に掌握するためのパノラマであり、そして王朝文化の再興への切なる願いが込められていたのではないだろうか。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、平安時代院政期に後白河院(1122-92 在位1155-58)の勅命を受けた宮廷絵師らが『伴大納言絵詞』の作風を取り入れて制作されたとみられ、全60巻に及ぶともいわれる『年中行事絵巻』の現存しない原本について、最も原本に近いとされる最古の模本とされる住吉本16巻(東京・田中家蔵)のうち、恐らく江戸時代前期に住吉派を創立した住吉具慶(1631-1705)が筆を執ったとされる巻1・第3段の「朝観行幸」を研究対象に取り上げ、その復元を想定し模写制作を行ったことを詳細に論述したものである。論文は序章・原本に代わる模本、第1章・『年中行事絵巻』と『伴大納言絵詞』、第2章・住吉本の模写精度に関する検証、第3章・住吉本図像の違和感に関する検証、終章・模本から見える原本像で構成され、これに付論として「原本の想定復元模写」が加えられている。

そもそも、現存しない平安時代の原本と江戸時代の模本から想定復元することが可能かどうか。すなわち住吉本の模写精度が問題になるところである。この点については、美術史的観点及び実技的観点から、住吉本は極めて正確に写された模写で、「摹し崩れ」さえ原本の図像にすでにあったもので、描写の線描は具慶自身の筆致の癖も認められるが、失われた原本の図像を考察する上で立脚点になりうることが検証されている。

住吉本は、正確に写された模本であるが、絵画としての違和感を覚える点もあり、例えば絵師の目線が一定でないこと、隣接する人物などモチーフ間相互の前後関係や距離感が曖昧であること、人物の平均身長の違いが大きいことそして描写の作風が一致するところと一致しないところがあるなどが挙げられる。したがって、住吉本の手本となった『年中行事絵巻』の原本は、分割可能な性質の異なる複数の図像の集合体で構成され、しかも境界線で分割できる図像は、各々異なる条件下で制作された図像であると見做され、複数の絵師が分担制作した部分的な下図から構成された図像を料紙に転写して制作されたものと推測される。この推測に基づいて原本制作時の下図を図示し、説明し想定復元模写を制作する。

以上のごとく、本論文は現存しない制作時の原本を忠実に写した模本を検証した上で、原本の制作工程を実技の観点から明らかにし、原本を想定復元模写したことは高く評価され、美術史研究にも裨益するところ少なくない。研究対象が巻1・第3段の「朝観行幸」のみであり、全巻に普遍してみるには難点がないわけではないが、考察の手掛かりになろう。

#### (作品審査結果の要旨)

「年中行事絵巻」は原本が失われた絵巻であり、模本によってのみ図像が伝えられている。原本は、後白河院の在位期に制作されたとの推定があり、同時期に制作されたと考えられている「伴大納言絵詞」との関連性が議論されてきた。模本は複数現存しているが、江戸前期に住吉如慶らが写したものが現存最古である。

五十嵐有紀さんの研究は、模本の住吉本から原本像の想定復元を試みるもので、失われた文化財の復元像を提示するという挑戦的な研究である。これまで本学の保存修復日本画領域では、博士の学位研究として変色した色彩の復元や失われた部分の復元が数多く試みられてきたが、完全に失われた文化財（写真画像も残されていない）の復元は初めてのことである。

五十嵐さんの研究は、美術史学による先行研究を踏まえながらも、常に絵画制作や修復といった実技的な視点に立ち、模本の図像や状態の詳細且つ多角的な分析から原本の図像に迫るものとなっている。その結果として、住吉本が比較的忠実に原本を写した模写であろうこと、原本が複数の下図の組み合わせによって描かれたであろうこと、をはじめとする重要な知見を得ている。

研究成果として制作された作品は、「年中行事絵巻」の朝覲行幸部分を対象とした原本下図の想定復元と原本の想定復元模写の2点から成る。模本の分析から想定された複数の下図を自ら描き、組み合わせた状態で提示した原本下図の復元は、絵巻制作のリアリティーを感じさせる作品として高く評価できるものである。従来の復元研究では、最終的な復元図像は提示されても、復元図像に至る工程が提示される事例は少なかった。同作品は、図像の復元と同様に作業の復元が重要であることを明快に示した画期的なものとなっている。また、原本の想定復元模写に際しては、本紙の加工や色材の選択が入念に行われた上で、時代性を勘案した描線の復元や色彩の復元が試みられた。以上2点の作品は、五十嵐さんの研究成果を具現化させたものであり、保存修復日本画領域における高度な模写技術と表装技術によって制作された作品として高く評価できるものである。

#### (総合審査結果の要旨)

研究対象作品「年中行事絵巻」（以下原本）は、現在では消失してしまっているため文献資料や模本資料によってのみ伝えられてきている。原本に最も近いとされる現存最古の模本である住吉本と国宝「伴大納言絵詞」との絵画様式が非常に類似性が高いという指摘に基づき、住吉本を元に「伴大納言絵詞」の線描や彩色法を参考に原本の復元を試みるという、実技的観点にたった研究と作品であり、先行研究では一度も行われてこなかった画期的な研究として、そのもつ意義は大きいものがある。

原本が完全に消失してしまっている作品の復元という、確固たる解をもたない研究である。美術史界では「伴大納言絵詞」を描いた絵師が関与したという先行研究は定説化しており、実際に原本がどのようなものであったかという興味は尽きないものの、いざ復元となると賛否両論であった。

そこで、先づ最も信頼できる資料である、現存最古の模本住吉本の図像の模写精度の検証を行うところから始めた。模写の制作方法は、手本の図像を正確に写し取ることができる敷写しで行われており、模写の料紙としては薄手の和紙を使用し、25cm程度の幅で切り揃えて復元に使用している。料紙の継ぎ目に注目した結果、多くの継ぎ目の図像の重なり具合の整合性を見ると、住吉本の模写精度の高さがうかがえる。しかし住吉本が原本通りであるとすると、他の絵巻作品と比べると絵画的要素が低く感じられるのは否めない。その理由として、年中行事絵巻は当然ながら異なった条件下、つまり時期と場面が異なった図柄の合成であり、複数の宮廷絵師が分担して描いてきた作品であるためである。今回の研究では、目線の違いや場面の区分けの違い等を詳しく作家の目線で検証し、年中行事絵巻の制作における特徴である多くの場面を寄せ集めて描かれている事が解明された。このような観点から年中行事絵巻を分析した前例はなく、この新しい発見こそが今回の実装を伴う研究の大きな成果に繋がった。

また住吉本と伴大納言絵詞の作風を比較すると、部分的には酷似したところが見受けられ、原本が伴大納言絵詞の筆頭制作者の作風を模倣して描かれた可能性は高い。その他青系の色幅が豊富である点からも

その特徴が窺える。しかし、年中行事絵巻は絵画性よりもむしろ、都の風景を写實的に描き、年中を通した洛中の行事や民間風習を描き留める事が目的であったと考えられる。

そして、復元模写を通した研究により、原本の一角を垣間見ることが出来た成果は大きかった。思い切った実技的観点に基づいた研究が行われたことは、過去にはあまり例がなく新しい研究手法として今後高く評価されるものである。